日本医史学雑誌第三十七巻第三号
平成三年七月三十日　発行

ベルツの明治九年の日本奥地旅行

小関恒雄

『ベルツの日記』[一]は単なる一個人の「備忘録」を越えて、わが国の近代化過程の一級資料さらには古典的教養書としても評価が定まっている。それはまさにその通りではあるが、細事にこだわれば検討ないし説明を要する点もあるだろう。[二～四]

私はかねて該『日記』の中で気になる箇所があった。それは明治九年（一八七六）十月二十五日の項で、ベルツ曰く、「七月十日から九月十一日まで二カ月の休暇中に、友人シュルツェ博士とこの国の奥地へ五週間にわたって旅行し、『新潟』の西海岸まで行って引返しました。」と。「……奥地」とは原文（一九三一）では“das Innere des Landes”となっている。

この旅行については緒方[五]、安井[六]も関心を示し、ベルツのツツガムシ病との出会いを（希望的に）示唆している。ちなみに、次いで該『日記』にベルツの新潟行が出てくるのは、明治十二年九月二十一日の項であり、「昨年越後で研究した『ロイマチス性熱』に関する論文をやっとのことで完成し、昨夜の郵便でベルリンのフィルヒョウへ、その文庫で発表してもらうため送附した。」とある。昨年、つまり明治十一年（一八七八）「八月中、東京医学部教師ベルツ氏長岡ニ出張シ、二週間ノ研窮ヲナシタリ」[六、七]という通り、ここでのツツガムシ病の現地調査などを基に論文を仕上げ、Arch. Pathol. Anat. 誌に投稿したのである。

私は先年来、ベルツの同僚の外科教師シュルツェ（Wilhelm Schultze, 1840～1924）について調べてきたが、[八] この明治九年の両人の奥地旅行については明らかにできなかった。御雇教師たちの内地旅行届（願）が「公文録」などに散見するが、肝腎の明治九年夏の東京医学校教師たちの該文書は含まれていない。

私はその後、ベルツやシュルツェの知合いで当時東京外国語学校ドイツ語教師だったクニッピング（Erwin Knipping, 1844～1922）について調べる機会を得たが、[九] その折偶々ベルツらの件の旅行に関する記事を見出した。

ベルツは明治十年（一八七七）十一月二十四日、東京で開かれた「ドイツ東亜文化研究協会」の例会で、件の奥地旅行"Reise von Tokio über Nikko nach Nigata"について口演した。[一〇] そしてそれをクニッピングが抄録投稿している。[一一] いつ出発したかなど、日にちは記していないが、七月の終りのようである。コースは日光から金精峠を越え小川、戸倉と辿る。尾瀬峠（三平峠）を越えて尾瀬沼を過ぎ、燧ヶ岳を左に桧枝岐に至る。伊南川沿いに沼田街道を進む。叶津から八十里越を経て三条、新潟に至る。長岡は通過していない。

「新潟は清潔で整った街であるが、旅館の主人は不愛想である」と。新潟からは阿賀野川を越え新発田へ向う。諏訪峠を越え津川、若松に出る。日光街道を進み、大峠、三斗小屋を越えて大田原、宇都宮を経て帰京する。

一方、前述クニッピングも日光から尾瀬に入っており、旅行記を残している。[一二] それによれば、日光から金精峠、戸倉、尾瀬、桧枝岐、ここから大津岐峠を越えて銀山、明神峠（枝折峠）、大湯、小出、六日町、清水峠を越え沼田に出る。そして根利、花輪、足尾から細尾峠を越え日光に戻る。全行程に十一日を費す。

こちらも日にちが明記されていないが、「公文録」（明治九年七～十二月文部省）によれば、彼は「健康保療ノ為家族同行去七月十六日発程野州日光ヨリ高崎ヲ経テ越後新潟ニ到リ夫ヨリ若松ヘ出テ尋テ宇都宮ヲ経テ関宿ニ到リ本月〔八月〕

三十日迄ニ帰校」と旅行届をしている。前述旅行記と行程が異っているが、当時の旅行は仲々予定通りには行かなく、この程度の食違いはよくあることだった。尤も、彼は明治七年にも同方面に旅している（『外国人雇入鑑』第四巻）。

ともかく、ベルツらとクニッピングのこれら一大山旅は当時としては特記すべきものであり、例会発表（投稿）となったものであろう。ちなみにクニッピングは精細な地図を付けている。[一二] シュルツェらは「夏休みになると山ばかり歩く」[八、一三] といわれるのも頷けよう。

しかし、これら旅行はどうやら「奥地」を旅行することが目的であったようであり、つい憶測したくなるようなツツガムシ病調査とは直接結びつきそうもない。（日程「五週間」[一] とは、おそらくは日光滞在も含めた全日程ではなかろうか。）尤も、このベルツらの旅行の抄録[一一]誌が医学雑誌ではなく地理学雑誌であるから、意識的に地形や山の測量（標高）のみを記しているのかも知れない。少なくとも言えることは、ベルツがツツガムシ病について調査を志した（或は成果を得た）旅行ではなさそうだということである。

安井広、北村智明両先生、並に東京大学附属図書館、草津町役場の御教示御好意に深謝する。

文献および注

（一）トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』岩波書店、一九五一～一九五五。

（二）林健太郎「ベルツとリース」『日本歴史』三〇〇号、九四～九七頁、一九七三。

（三）小関恒雄「ベルツに関する資料若干」『日本医史学雑誌』二九巻、六四～六九頁、一九八三。

（四）小関恒雄、不破義信、北村智明「『ベルツの日記』の一検討――東京大学医学部開業式（一八七九）を例に――」『医学図書館』三一巻、二一一～二一八頁、一九八四。

(五) 緒方規雄『日本恙虫病（パラ恙虫病）』医歯薬出版、一九五八。
(六) 安井広「E・ベルツとツツガムシ病」『日本医史学雑誌』三四巻、二三二～二四四頁、一九八八。
(七) 小林清之進「恙虫病調査ノ沿革〔附〕累年ノ同病者及ヒ死亡表」『北越医学会会報』一四四号、二〇二～二一〇頁、一九〇四。なお、この時のベルツの「旅行免状」の写しが、市川善三郎『ベルツと草津温泉』一九八〇に載っており、「明治十一年七月廿五日より三ヶ月間」「学術研究」のため「東京ヲ発シ武蔵上野下野信濃岩代越後羽前ノ国々ヘ順路往復」とある（安井広氏教示）。なお、拙著（八）参照。
(八) T・ヘゼキール編著、北村智明、小関恒雄訳『明治初期御雇医師夫妻の生活』玄同社、一九八七。
(九) 小関恒雄、北村智明訳「クニッピングの明治日本回想記」『日本医事新報』三四一六号、六二～六五頁、三四一七号、六四～六七頁、三四一八号、六五～六八頁、三四一九号、六五～六八頁、三四二〇号、六五～六八頁、一九八九。
(10) Mitt. dtsch. Ges. Nat.- Völk. Ostasien., 2 : 152, 1878. ただし "Reise durch Echigo und Iwashiro" について発表した、とあるのみ。
(11) Petermanns geogr. Mitt., 24 : 114-115, 1878.
(12) Knipping, E.: Reise durch den mittleren gebirgigen Theil der Hauptinsel von Japan, Petermanns geogr. Mitt., 28 : 81-84, 1882.
(13)『東京帝国大学法医学教室五十三年史』同教室、一九四三。

（新潟大学医学部）